

# フォトシティさがみはら

## TOPICS

これは、市民が写真文化により親めるよう実行委員会が編集・発行するものです。

DOCUMENT! 記録!  
EXPRESS! 表現!  
MEMORY! 記憶!



10月はフォトシティの歴史を重ね、刻む月間です。今年  
の受賞者を顕彰し、プロの部の受賞作写真を紹介して写  
真家のみなさんから作品解説をいただくシンポジウムが  
今年も10月12日〈杜のホールはしもと〉にて行われました。

今年のプロの部受賞者は沖縄のガンジーとも呼ばれた阿波根  
昌鴻さん、アジア賞はカンボジアから選出のフィロン・ソバンさん、  
新人賞は〈「神国」の残影〉写真展の稲宮康人さん、自傷  
行為と向き合う写真「針の落ちる音」の林詩硯さん。その写  
真表現の共通するところは「痛み」。

米軍基地に土地を奪われたことに抵抗する闘いの沖縄。170  
万人にも及ぶ犠牲者を生んだ歴史をひきずりながら急拡大する  
都市プンペンの夜景。「神国」を称した歴史の総括を果たし  
たとは言えない名残の神社跡。さらには自傷するひとりひと  
りの孤立にどう向き合えるのか。林さんが指摘されるように「痛  
みの唯一の共通点とは、他人と共有できない体験であること」。  
オープニングシンポジウムの進行をつとめたのは、本賞審査員  
でもある伊藤俊治先生。伊藤先生は、本年度ノーベル平和賞  
の日本原水爆被害者団体協議会や同文学賞のハン・ガンさん  
の名前にも触れながら、戦火やまぬ現在の世界にあって、「共  
感と共苦」という人々の関係性と想像力が求められており、  
写真の力が大きな役割を果たすことを示唆してくれました。「共  
感」も「共苦」も簡単に手にできるものでは、もちろんありません。

それだけに、写  
真の持つ力の深  
さに触れること  
のできる今年  
の受賞作写真展  
だと  
言えるのも確  
かな  
気がします。



▲シンポジウムの様子 左から伊藤先生、林さん、小原真史さん（阿波根さん写真展企画者）、  
通訳者のひとりおいてフィロンさん、稲宮さん

### 沖縄の事実を記録した 写真を未来に託す

### あはごん しょうこう 阿波根昌鴻さんを あらためて記憶しよう



阿波根さんにかわり  
表彰式列席のために相模原に  
お見えくださった後継者の  
「わびあいの里」理事長の  
謝花（じゃはな）悦子さん

2002年3月、阿波根昌鴻さんは101歳で永眠されました。沖縄・伊江島で戦火を生き抜き、戦後に夢見た農民のくらしは、土地を米軍基地のため強制接収されて砕かれました。が、以来、反戦地主として土地を守る運動の先頭に立ち、自宅敷地に反戦平和資料館「ヌチドウタカラ（命こそ宝）の家」を建設、「わびあいの里」を設立されました。阿波根さんは、当時でも珍しかった二眼レフ写真機を購入、反基地闘争の真実や伊江島の人々の暮らしを撮影し3,000コマを超すネガを残しました。このネガから小原真史・東京工芸大学准教授を中心にデジタルデータ化。今年2月から5月まで原爆の図丸木美術館にて開催された写真展「阿波根昌鴻 写真と抵抗、そして島の人々」が今年のフォトシティさがみはら写真賞の対象となりました。授賞式にお見えの「わびあいの里」後継者の謝花さんは「阿波根は死んでも魂は残ると言っていました。この世から戦争をなくすためまだまだ頑張りたい」と力強く語ってくれました。死後20年以上を経て、再び雄弁に反戦を語る「詫び合い」の精神に触れる写真たちです。

## 時代が求めるテーマは共感と共苦 写真の力が共にあることを手助けする

阿波根さん

- 受賞作写真展は市民ギャラリーにて10月28日まで開催。
- 見逃された方は来年1月に二コンプラザ東京で写真展開催予定。
- 写真展ガイドブックは1冊3000円で文化振興課で購入できます。